

てといふ事見え、此冊子より前、東海道名所記萬治元年作四の巻にも、池鯉鮒より鳴海まで云々の條に、伊も川うどんそば切あり、道中第一の鹽梅よき所なりとあれば、今平温鈍をひもかはといふは、芋川の誤りなるべし、其さまの似たるをいは、革紐とこそいはめ、紐革とはいふべからず、されどひもかはと、あやまりしも又ふるし、誰袖の海にも芋川の事あり

富士石延寶七

ひもかは温鈍捨水碎く氷かな

調川

題は春水なり、當時はやくひもかはといへり、今も諸國の海道には、彼幣めきたる看板ありとぞ、又温鈍の粉をねりて、熨ざるほどの形を偽たるなるべし、鏡餅の勢したる物を、臺に載たる看板、田舎にはありと聞き、

〔好色一代男〕旅の出來心

芋川といふ里に若松昔の馴染ありて、住みあらしたる笹萱をつゝりて、所の名物とて、平鯉鈍を手馴れて、往來の駒留めて、袖打拂ふ雪かと思れば、なととうたひ懸けて、火を焼く片手にも、音じめの糸をはなさず、浮々とおとろひ、

干鯉鈍

〔尾張名所圖會前編六〕名和干温鈍同村(名和)の名産也、凡當郡の小麥粉精密にして、最上の極品な

〔江戸町中喰物重寶記〕干うどん

下谷佐久間町 叶屋辰右衛門略下

〔武江産物志〕行徳乾温淘

〔奥羽觀蹟聞老志三〕府貢土産雲麵 乾鯉鈍 雲麵出于刈田郡白石、乾鯉鈍出于南部及仙臺城市、

謝東奥友人遺白石雲麪

物茂卿

誰探王女洗頭盆、中有千絲白髮存、不知仙人憂底事、將憂相送到護園、